

第2章 桑折町の維持・向上すべき歴史的風致

桑折町には、前章でも触れたように、桑折西山城跡や半田銀山、西根堰、旧伊達郡役所、奥州・羽州街道の分岐点である追分など、官民一体となって守り継いできた歴史的文化遺産が数多く残っている。

一方、歴史的風致とは、歴史まちづくり法第1条において「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史的価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義している。

すなわち、下記の3点の条件をすべて満たすものが歴史的風致になり得ることとなる。

- ① 桑折町固有の歴史や伝統を反映した活動が、現在も行われていること
- ② ①の活動が歴史的価値の高い建造物及びその周辺の市街地で行われていること
- ③ ①の活動と②の建造物が一体となって良好な市街地の環境を形成していること



■図 「歴史的風致」の概念図

こうした条件を考慮し、桑折町における歴史的風致として次の5つを選定した。

- ①伊達氏発祥の地にみる歴史的風致
- ②桑折宿と諏訪神社の夏祭りにみる歴史的風致
- ③西根堰と水路網にみる歴史的風致
- ④阿武隈川氾濫原の果樹栽培にみる歴史的風致
- ⑤半田の京都祇園囃子にみる歴史的風致

それぞれの詳細は次頁以降で述べていく。

1. 伊達氏発祥の地にみる歴史的風致

(1) はじめに

桑折町大字万正寺周辺には、戦国時代に伊達氏 14 代植宗が本拠として築いた桑折西山城跡をはじめ、伊達氏初代とされる伊達朝宗の墓所とその周辺に広がる伊達五山のひとつ満勝寺跡と考えられている下万正寺遺跡、桑折西山城跡の麓にあり、伊達五山のうち唯一伊達郡に残された観音寺など、伊達氏ゆかりの遺跡が多数残されている。伊達氏が伊達郡を離れると、城館や寺社は廃されて荒廃し、あるいは伊達氏に従って仙台等に移転した。



■ 図 伊達氏関連遺跡

しかし、江戸時代中期に仙台藩が家史編纂事業を企画し、桑折をはじめ旧領地の調査を行うと、地元民も触発され、全国有数の大名伊達氏発祥の地としての意識を育んでいった。そして伊達氏関連遺跡の地元ならではの伝承が形成、継承されるなかで、遺跡の愛護・広報活動が行われるようになった。

戦前・戦中にはいわゆる南朝忠臣の顕彰活動が行なわれ、また、昭和30年(1955)の1町3村合併による新桑折町成立時の教育活動の題材として取り上げられるなど、伊達氏関連遺跡の保護活動は地域の統合の象徴として取り扱われた。それらの活動は、形を変えながらも現在まで続いており、「伊達氏発祥の地」としての町民の誇りとなっている。

(2) 伊達氏関連遺跡

① 桑折西山城跡と戦国時代の桑折宿町

桑折西山城は桑折市街地の西側約500m、大字万正寺の高館山に築かれた戦国時代の山城である。城は、それより以前にも伊達氏初代朝宗が築いた高館城がそのはじまりである¹とか、9代大膳大夫政宗が鎌倉公方に対峙して籠城した赤館城もこの城である²ともいわれている。

現在、城跡は「桑折西山城跡」として国の史跡に指定されており、土塁や空堀、虎口等がよく残されている。



■写真 桑折西山城跡の本丸



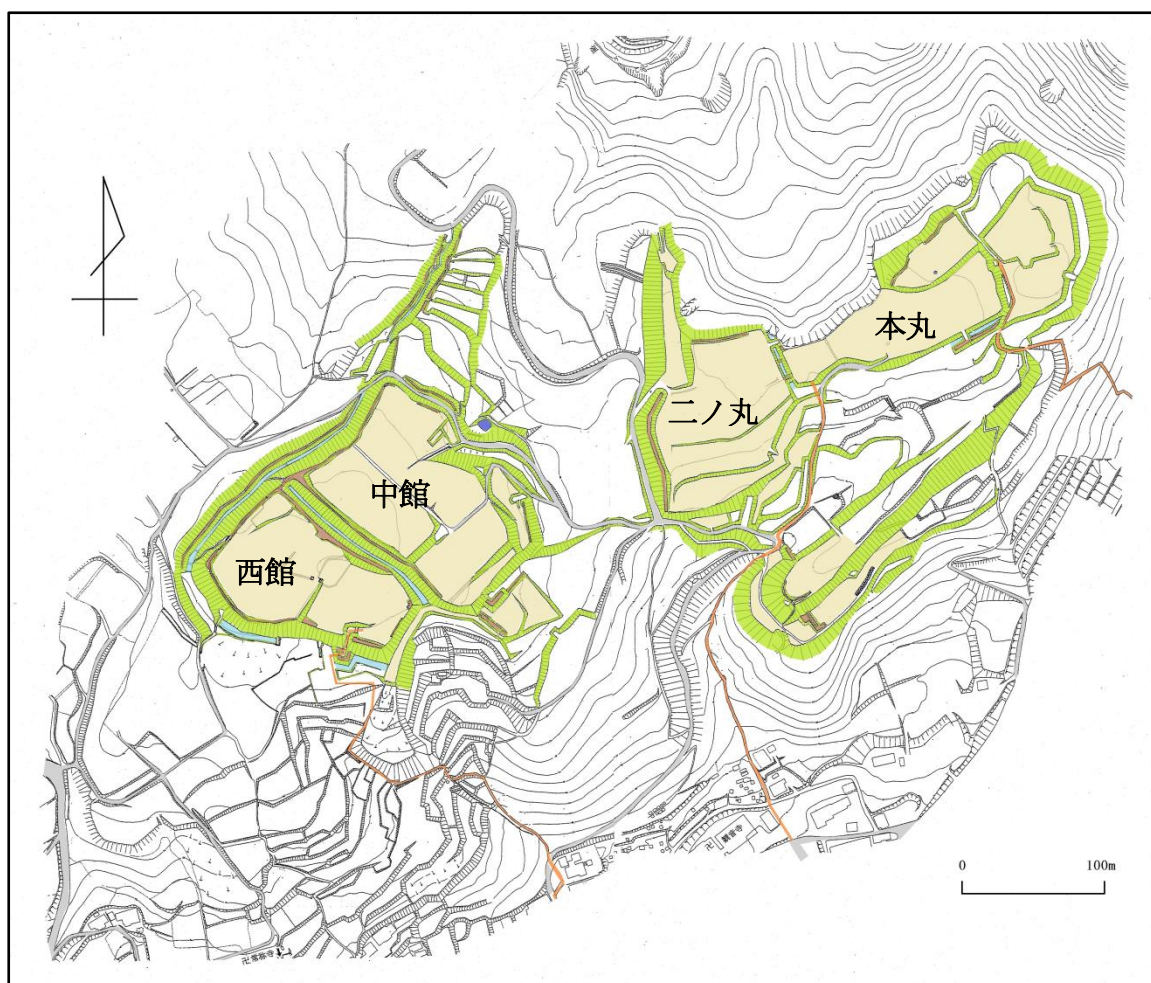
■写真 桑折西山城跡本丸中心建物



■写真 桑折西山城跡出土遺物(越前焼)

¹ 桑折醸芳尋常高等小学校『桑折町郷土誌』(桑折醸芳尋常高等小学校1940年)397ページ

² 「伊達正統世次考」(宮城県図書館所蔵)桑折町史編纂委員会『桑折町史第5巻』(桑折町史出版委員会1987年)中世史料94



■図 桑折西山城跡縄張図

桑折西山城は、伊達氏の本城として築城され、発掘調査で確認された遺構や、戦国家法「塵芥集」がこの城で編纂されたことからわかるように、戦国大名伊達氏の政治の中心となっていた。また、奥州を縦貫する主要街道であった仙道(奥大道)と、伊達氏の重要な領土となっていた出羽長井を結ぶ街道の分岐点を眼下に置く、交通の要衝を抑える城でもあった。

植宗は築城と同時に宿町も整備したと推定され、伊達氏の西山在城中の文書³に「西山本町」が記載され、さらに本町遺跡の発掘調査の成果等から、字本町付近が築城と同時に現市街地の原型として造られた可能性が高い。

また、「塵芥集」には「西山の橋本」という記載があり、現在の万正寺の大カヤ付近の旧字名が「橋本」であることから、現桑折市街地から「温泉通り」と呼ばれている町道を経て坂町地区に至る道路の前身が、桑折西山城と桑折宿町を結ぶ基幹道路だったことが分かる。桑折西山城麓の観音寺境内、大榎遺跡、二本木遺跡(大字南半田)には家臣の屋敷地が展開し

³ 「晴宗公采地下賜録」前掲『桑折町史第5巻』中世史料 330

ていたと考えられ、桑折市街地がある段丘の縁辺部には、字庫場の播磨館をはじめとする城館が多数存在した。

② 伊達朝宗の墓所

桑折西山城跡の南約1kmのところに伊達氏初代の朝宗の墓所がある。現在の五輪塔の墓碑は仙台藩主14代斉義が文政4年(1821)に建立したものである。

伊達朝宗の墓所周辺は朝宗菩提寺の満勝寺跡と考えられている下万正寺遺跡で、源頼朝が藤原泰衡を弔うため、鎌倉に建立した永福寺と同様の文様を持つ軒平瓦が出土している。伊達氏が早い時期に桑折の地へ入部していることを示す遺跡であり、また、源頼朝が建立した寺院と同じ文様の瓦を用いることで、鎌倉幕府の支配下に組み込まれたことを示す遺跡でもある。満勝寺自体は仙台市北山に移され、現在も残っている。



■写真 伊達朝宗の墓所

③ 観音寺

観音寺は、伊達氏4代政依が建立した伊達五山のひとつで、3代義広が建立した三十三体観音の系譜も引くという。伊達氏が仙台へ移ったために一時衰退したが、江戸時代中期に半田銀山の山師野村勘右衛門が中心となり、残されていた観音大仏(坂町観音堂)の別当寺院として再興した⁴。この時、伊達義広ゆかりの三十三体観音をしのいで、高館山(桑折西山城跡)に石碑のかたちで復活させた。奥之院に安置されている木造聖観世音菩薩坐像(福島県指定重要文



■写真 観音寺秘仏の開帳

檀家衆総出で奥の院から本堂に遷座する。

化財)は、秘仏であるため通常は拝観することができないが、享保17年(1732)の再興修理以後現在に至るまで、33年に1度の開帳が行われている。開帳の際はご利益にあやかろうと、地元のみならず遠くから人々が訪れる。現在の観音堂は、元禄2年(1689)に建立されたとの

⁴ 「観音寺記録集」桑折町史編纂委員会『桑折町史第6巻』(桑折町史出版委員会1998年)文化史料42

記録が残っており⁵、江戸時代中期から残る数少ない建造物の一つである。

④ 万正寺の大カヤと大榿遺跡

観音寺南東の境外地には、福島県指定天然記念物の万正寺の大カヤがある。目通り幹囲約8.2m、樹高約15m、枝張東西28m、南北29mを測り、樹勢としては全国でも最大規模となる⁶。木の生えている場所は周囲より少し高く、土塁や塚のようになっており、かつては五輪塔が建っていたという。樹下からは、骨蔵器として使用されていた瀬戸産瓶子や在地産陶器が相次いで発見され、墓所であった可能性が高い。出土品は昭和59年(1984)に県の文化財に指定され、周囲は中世遺跡の大榿遺跡として周知された。



■写真 万正寺の大カヤ

周囲は塚状に盛り上がり、墓所になっていた。

大カヤには「伊達朝宗が高館城(桑折西山城)に入部した記念の御手植えの木である。」⁷という伝承や、「伊達氏の時代、坂町観音に参詣した帰りの政義様(伊達氏4代政依のことと思われる)が1尺程のカヤの枝を拾い、それを観音近くに指して帰ったところ、枝が根付き、たちまち大木になった。ある日、政義に随行していた家臣が急死したため、政義がカヤの木の根元に葬った。その後、政義が観音参詣をした帰り、悪人に襲われたが、カヤの木が楯となって難を逃れることができた。また、ずっと後、カヤの木の近所の男がカヤの木が邪魔だといって枝を切り始めた。そのとき切り口から血のような赤いものがしたたり落ち、折から降ってきた雪を真っ赤に染めた。男は驚いて木から落ち、ひどい目にあった。それからというもの、カヤの木には人の血が通っているということで、誰もカヤの木に手をかける人はいなくなった。」⁸という昔話がある。万正寺の大カヤが伊達氏との関係で語られていたことを示すものである。

⑤ つつじヶ岡遺跡と天神川原天神社

天神川原の天神社は、正式には菅原神社と称し、創建は明らかでないが、戦国時代の弘治

⁵ 「観音寺記録集」桑折町史編纂委員会『桑折町史第4巻』(桑折町史出版委員会1998年)文化史料42

⁶ 榎村利道「県指定天然記念物『万正寺の大カヤ』調査報告書」(福島県文化財保護審議会委員の現地調査報告1997年)による。

⁷ 桑折町「広報こおり第1号」(桑折町1961年)

⁸ 半田むかしむかし出版委員会『半田むかしむかし第6集 美しい桑折に伝わるむかしばなし』(半田むかしむかし出版委員会1980年)第23話

4年(1558)には存在が確認できる⁹。江戸時代には万正寺村の鎮守となり、天保9年(1838)に産ヶ沢川上流の字沼田に遷座され、菅原神社となったが、もとの境内にも社は残され、天神川原天神社と呼ばれた。現在の社殿は本殿が慶応3年(1867)に造られた石造のもの、拝殿が大正14年(1925)に建てられた木造である¹⁰。

この社のある小丘は、明治時代には「つつじヶ岡つつじがおか」と呼ばれるようになっていた。仙台の榴ヶ岡にある天神社がここから遷座されたと地元でいわれていたことによる。なお、仙台の天神社の縁起によると、現在の相馬市に創建され、柴田郡、仙台市の玉手崎（現東照宮境内）を経て現在地に移されたことになっている。



■写真 つつじヶ岡遺跡

(3) 伊達氏関連遺跡に対する町民意識

江戸時代中期になり、伊達氏が仙台藩 62 万石の大名として安定すると、仙台藩 4 代藩主伊達綱村が家史編纂事業に取り組み、伊達郡には調査員が派遣され、桑折西山城跡をはじめ、伊達氏ゆかりの遺跡が調査された。

この調査では、伊達朝宗の墓所について、「(伊達家) 先祖の墓所とも頼朝公の墓所とも言われている。」¹¹ということが聞き取りされ、また、桑折西山城跡については、大館・中館・御隠居館の 3 郭からなる山城としてスケッチされている。これらのことから、当時地元では、伊達朝宗の墓所は「実名こそ分からないものの、源頼朝に関わった伊達家の祖先の墓」という認識で、桑折西山城跡は「西山城」と呼ばれていたことが忘れられているという状況であったことがわかる。



■写真 桑折西山城付近絵圖
(宮城県図書館所蔵)

⁹ 「八幡宮祭礼規式写」(梁川町関根重治氏所蔵)前掲『桑折町史第5巻』中世史料 372

¹⁰ 菅原神社石造本殿の銘による。

¹¹ 「伊達信夫廻見仕候覚書」桑折町史編纂委員会『桑折町史第4巻』(桑折町史出版委員会 1998年)232 ページ

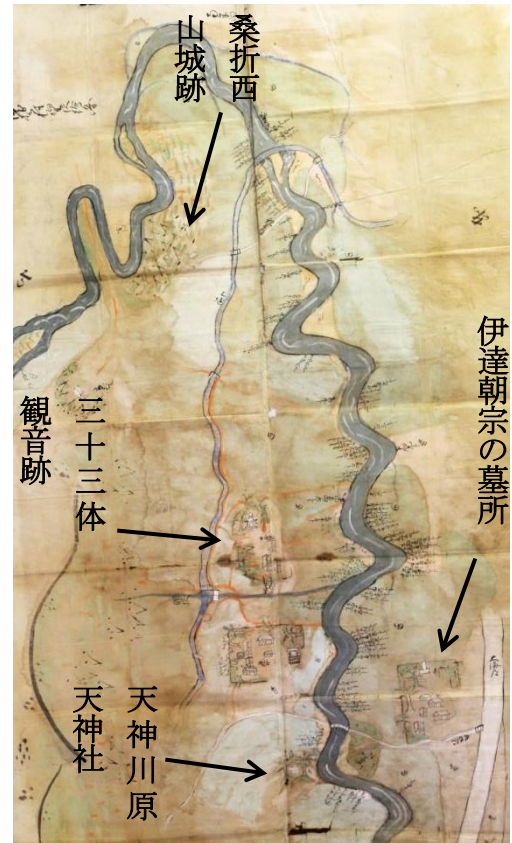
綱村の家史編纂以後、仙台藩は参勤交代する際、奥州街道に近いこの墓所を参詣または街道より遥拝するようになり、地元百姓を墓守に任命して管理を行わせている。文政4年(1821)には仙台藩11代藩主斉義によって五輪塔の墓所も建立された¹²。

伊達家による先祖調査が行われたことで、地元でも、ここが伊達氏のルーツの地であるということとを再認識した。この後、諏訪神社では、「初代朝宗の高館城築城以来の伊達氏居城の守護神」と称して、梁川の八幡神社(伊達氏の氏神亀岡八幡宮と称す)の神主とともに伊達家に挨拶を行なうようになった¹³。観音寺は江戸時代中期頃、半田銀山の山師らによって3代義広ゆかりの寺院として再興され、義広が居館の中屋敷に安置したという三十三観音を高館三十三観音として復活させた¹⁴。このような活動を通して「伊達氏の発祥の地」という意識がさらに醸成され、桑折周辺にある遺跡や寺社等が、伊達氏と関連づけて語られるようになる。

そもそも「桑折」の地名は、古代の郡衙があったことに基づくと考えられている。しかし、この地名も、「鎌倉時代頃、伊達為宗が阿武隈川の氾濫による耕地の被害を鎮めるため、氏神の諏訪神社に祈願し、「桑島」という地名を「桑折」と改め、桑樹を植えて養蚕を奨励せよ」という託宣を得たことによる¹⁵といわれるようになった。

また、万正寺の天神川原天神社は、沼田にある菅原神社の前身で、仙台榴ヶ岡天神社がここから移されたといわれる¹⁶が、仙台榴ヶ岡天神社では、相馬から柴田郡を経て移されたといっている¹⁷。

万正寺の大カヤの樹下から出土した人骨の入った中世陶器は、当時としては高価なもので



■写真 万正寺村絵図(古釈迦堂文書)
伊達氏関連遺跡を意識して描かれている。

¹² 伊達朝宗墓所五輪塔銘による。

¹³ 「肯山公治家記録」平重道『伊達治家記録18』(宝文堂出版販売1980年)192ページ

¹⁴ 「観音寺記録集」前掲『桑折町史第4巻』文化史料42 なお、観音石碑は桑折西山城跡二ノ丸にあったが、現在は滅失している。

¹⁵ 前掲『桑折町郷土誌』3ページ

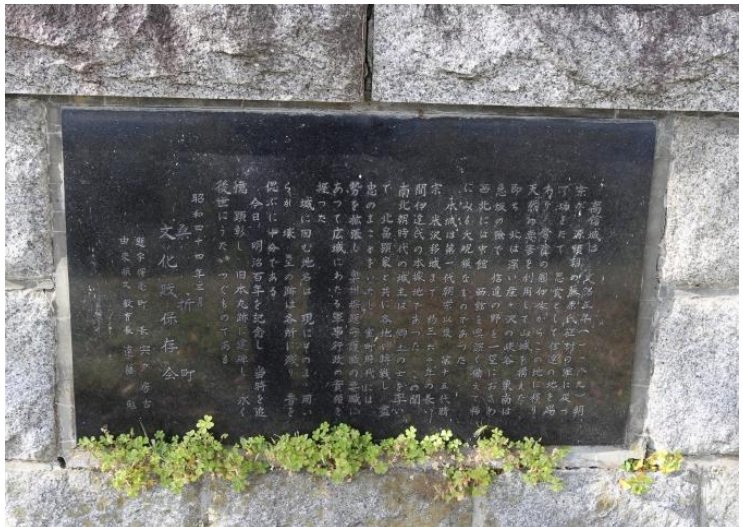
¹⁶ 同上註

¹⁷ 「封内風土記」宮城縣史編纂委員会『宮城縣史28』(宮城県1958年)897ページ

あった。また、カヤの木の下に五輪塔があったと伝わることから、万正寺の大カヤは、貴人、すなわち伊達氏の墓所といわれるようになった。次第に、大カヤは墓所の所在が不明確な4代政依の墓所で、カヤの木は伊達朝宗の御手植えといわれるようになっていった。

明治維新後は、伊達氏は62万石の大藩であるという見方から、南朝の忠臣として活躍した7代行朝を輩出した名家であるというように評価が変わった。さらに、下万正寺に墓所がある初代朝宗が伊達郡入部にあたり高館城(桑折西山城)を居城とし、7代行朝が北畠頭家を迎え、そして15代晴宗が米沢に移るまで360年間居城であり続けたといわれるようになる。

「伊達正統世次考」の記述から、伊達氏の居城は、少なくとも11代持宗から14代植宗まで梁川城であったことは通説となっていたが、初代朝宗が入部し、7代行朝が南朝に忠誠を誓い、9代政宗が鎌倉公方に対峙した地であり、晴宗が米沢に移っていくまで、伊達氏の歴史的場面がすべて桑折の地で行われたという「伊達氏発祥の地」の住民自負が形成されてゆく。



■写真 高館城址碑にある由緒書プレート

高館城は、文治五年(一一八九)朝宗が、源頼朝の藤原氏征討の軍に従って功をたて、恩賞として信達の地を賜わり、常陸の國伊佐からこの地に移り、天然の要害を利用して山城を構えた。即ち、北は深い産ヶ沢の峡谷、東南は急坂の險で、信達の野を一望におさめ、西北には中館、西館を奥深く備えて稀にみる大規模なものであった。

本城は第一代朝宗以来、第十五代晴宗、米沢移城まで、約三六〇年の長い間伊達氏の本據地であった。この間、南北朝時代の城主は、郷土の士を率いて、北畠頭家と共に各地に轉戦し、盡忠のまことをいたし、室町時代には、勢を拡張し、奥州探題守護職の要職にあつて広域にわたる軍事行政の實權を握った。

城に因む地名は、現にそのまま用いられ、壕、塁の跡は各所に残り、昔を偲ぶに十分である。

今日、明治百年を記念し、当時を追憶、顕彰し、日本丸跡に建碑し、永く後世にうたいつぐものである。

昭和四十四年三月

桑折町

文化財保存会

題字揮毫

町長

六戸房吉

由來撰文

教育長

遠藤 勉

■高館城址碑の由緒書プレートの文面

昭和14年(1939)に醸芳小学校がまとめた「桑折町郷土誌」では「高館城(桑折西山城)」が「高館こそ(伊達)朝宗の居城以来我が(旧)桑折町の發祥の地とし、又伊達氏の根據地となり、且つ地方開發の策源地となり行朝忠勤の根城となり代々忠臣を生んだ縁の地である。(下略)」として、城跡が当地方の民衆の統合の象徴としている。翌年(1940)、作成された桑折醸芳尋常高等小学校の努力事項では、この「桑折町郷土誌」を使って、郷土愛、ひいては皇国民としての意識の高揚が求められている¹⁸。また、



■写真 『桑折町のすがた』(左)と『桑折町郷土誌』(右)

それ以前から、高館城跡(桑折西山城跡)や観音寺は、睦合村内外の児童・生徒らの遠足の目的地となっていたことからわかるように、身近で親しまれた場所であった。

『桑折町郷土誌』は、その時代背景から、皇国史観の影響が強いものではあるが、伊達家發祥の地としての自負は、昭和30年(1955)に1町3村が合併して新桑折町が設立した時も、合併町村の統合のあかしとして表現されている。翌31年(1956)、郷土を学ぶ副読本として作成された『桑折町のすがた』では、冒頭に高館山(桑折西山城跡)が取り上げられている。伊達氏関連の記載は別項になるが、城跡からの眺望として合併町村の風景が紹介されている。合併町村の統合を象徴する場所として、城跡が選ばれていることは特筆できる。

以上のような経過で、地域には「伊達氏發祥の地」としての意識が植えつけられていった。それは、次のような伊達氏関連遺跡に対する愛護活動につながっていく。

(4) 伊達氏関連遺跡の愛護活動

① 桑折町民による愛護活動

伊達氏に対する地域住民意識の変化のもとで、昭和4年(1929)には睦合村や桑折町の有志が「高館城保存会」を設立した。この会は、城址保存、史実の調査研究を行うとともに、城址に桜樹を植林し、大衆の関心を集めて活用を図ろうという目的で設立された¹⁹。昭和13年(1938)伊達郡教育会が中心となり、伊達行朝頭彰碑建



■写真 桑折西山城跡

¹⁸ 「醸芳小学校文書」桑折町史編纂委員会『桑折町史第8巻』(桑折町史出版委員会1996年)近代史料899

¹⁹ 睦合小学校『睦合村郷土誌』(睦合小学校1932年)

設が決定された²⁰。戦時中ということもあり、建碑は実現しなかったが、これが高館城址碑建立の起点となった。

一方、伊達朝宗の墓所は、明治維新後に伊達家が東京に移住したため、子孫らによる墓参も無くなってしまったが、代わって仙台郷友会桑折支部が組織され、墓所の保存管理や墓前供養祭が行われた²¹。この墓前供養祭は昭和の初め頃まで続けられていたが、その後、供養等の活動は断絶し、墓所自体が伊達家にとっても縁遠いものとなってしまったため、荒廃が進んでしまった。第二次世界大戦終了後の昭和 30 年(1955)代後半、ようやく町民にも文化財復興の機運が高まり、伊達氏関連遺跡を中心とする町内文化財等の保護・顕彰活動を行うため、桑折町文化財保存会が昭和 41 年(1966)に創設された。この会は設立目的の第一に、高館城保存会の意志を継ぐ高館山遺跡の保護・広報活動や、供養が途絶えたため荒廃していた伊達朝宗公墓所の再整備などを掲げ、これらの事業を行うため町民有志を結集して結成された²²。

桑折町文化財保存会は当初約 140 名の会員により結成されたが、そのうち約 25 名は桑折西山城跡がある万正寺、平沢地区の住民であり、高館城保存会の構成メンバーが含まれていた。

なお、活動はその後、全町的な広がりを見せ、平成 2 年(1990)頃には会員約 890 名を数えるに至っている。

桑折町文化財保存会は、昭和 44 年(1969) 3 月に高館城址碑の建立を果たす。これにより、高館城保存会や戦中の伊達行朝顕彰碑建立計画以来の悲願を成し遂げた。さらに桑折町文化財保存会は、荒廃が進んでいた伊達朝宗墓所復旧事業を計画したが、計画立案当時、墓所を所有する伊達家が財産管理問題を抱えていたため、事業を直ちに推進することができなかった。昭和 53 年(1978)、伊達家より所有権が他家に移ったが、同年 6 月の宮城県沖地震によりさらに大破



■写真 高館城址碑の除幕式



■写真 荒廃していた頃の朝宗の墓所

²⁰ 前掲『桑折町郷土誌』357 ページ

²¹ 菱沼正人「朝宗公廟所整備のいきさつ」桑折町文化財保存会『ぬかりの里No.17』(桑折町文化財保存会 1982 年)

²² 桑折町文化財保存会『桑折町文化財保存会創設廿周年記念あゆみ』(桑折町文化財保存会 1986 年)、桑折町文化財保存会『桑折町文化財保存会設立三十周年記念あゆみ』(桑折町文化財保存会 1996 年)



■写真 伊達朝宗の墓所
満勝寺住職による供養。

した墓所は、その後、放置された。桑折町文化財保存会は、「桑折町民が「伊達氏の発祥の地として大変誇りに思っていること」、「墓所が諸事情により荒廃した状況になっていることを憂慮していること」を伊達家や伊達家一門、家臣の末裔らに訴え、丹念に復旧の必要性を解き、同57年(1982)ようやく周辺環境を整備して、墓所の修理を達成した。

以後も、桑折町文化財保存会は、会費から墓所修理費用の積み立てを行い、継続して修理を続けている。平成23年(2011)の東日本大震災で墓石や瑞垣が倒壊した際も、この積立金を充てて、墓所の修理が行われた。平成9年(1997)、仙台満勝寺の墓前供養に、桑折町文化財保存会が臨席するようになり、断絶していた墓前供養を復活させた。平成10年(1998)の伊達朝宗没後800年祭には、満勝寺住職を招き、現伊達家当主泰宗氏も列席の上、「墓前祭」を行った。以後、仙台満勝寺の墓前供養に併せ、継続して行われている。



■写真 文化財保存会会報「ぬかりの里」
伊達朝宗の墓所の修理落慶式の様子を
伝えている。



■写真 伊達朝宗公没後800年祭
盛大に行われた墓前祭。

桑折町文化財保存会では、桑折西山城跡や伊達朝宗の墓所での事業の他にも、昭和 42 年(1967)に伊達氏関連遺跡やその他の文化財の 15 か所に標柱を設置したことを皮切りに、町内各所に標柱や案内板を建てたり、それらを巡るモデルコースを作成したりしている(次ページ掲載図を参照)。さらに、文化財を巡る見学会や学習会を開催し、また、町外から桑折町の文化財を見学に来た人を案内している。年 1 回は文化財や歴史に詳しい専門家を招聘し、講演会を開催している。これらの事業により、調査された文化財の状況や町の歴史研究については、会報「ぬかりの里」(平成 28 年(2016)2 月 1 日現在通算 113 号)を発行し、町内外に公表している。また、町内外に紹介するための写真集やパンフレット、DVDの作成を行っている。特に平成 14 年(2002)に作成したパンフレット「伊達氏発祥の地桑折」は、それまでの桑折町文化財保存会の活動による成果に、行政が行ってきた町史編纂事業や発掘調査の成果を取り入れ、伊達氏の歴史と関連遺跡を分かりやすく解説した小冊子として好評を得ている。

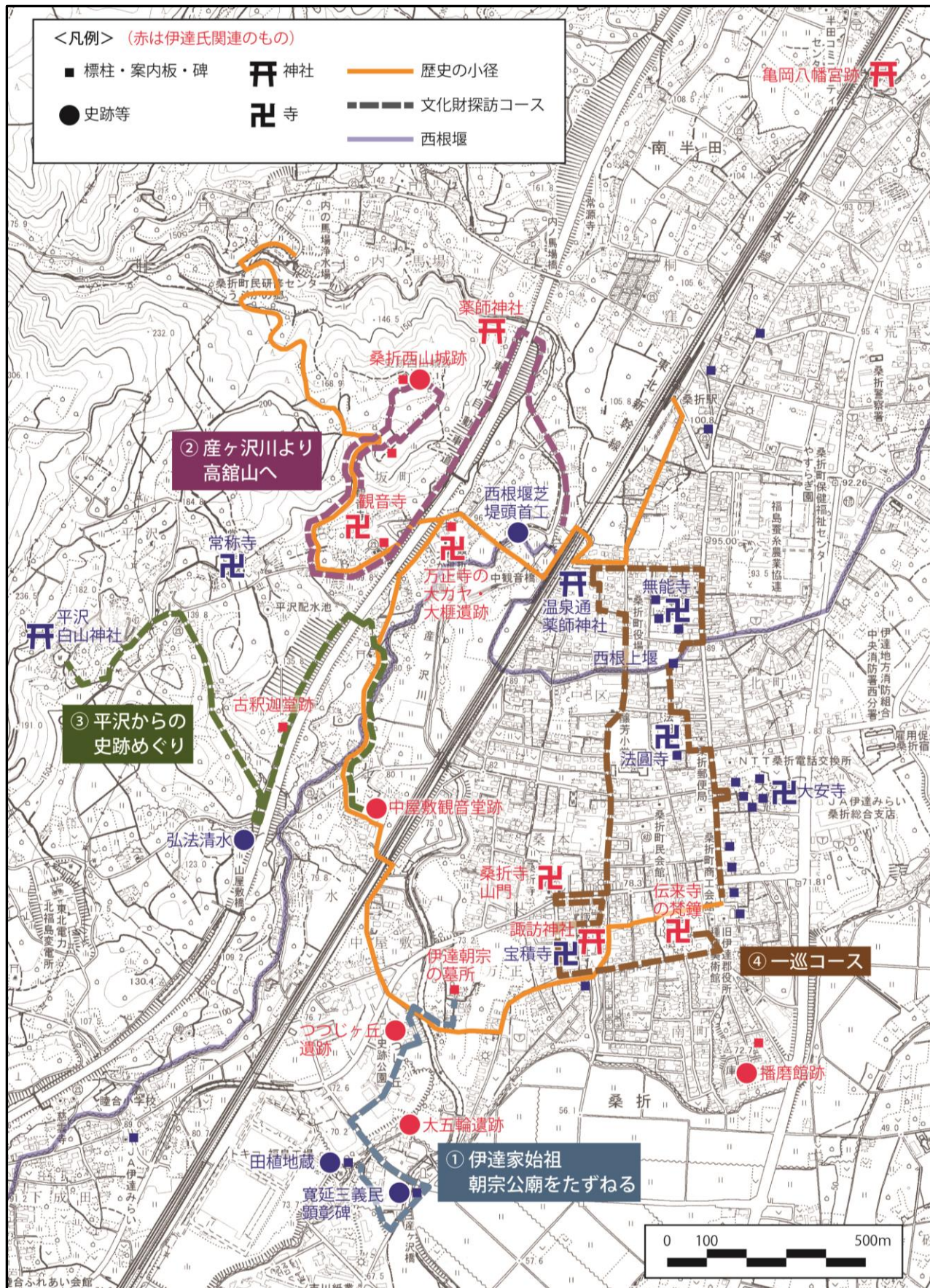


■写真 伊達朝宗の墓所での見学会
一行はこのあと、桑折西山城跡・観音寺・万正寺の大カヤなどを巡った(このときの案内人は文化財保存会員)。



■写真 「伊達氏発祥の地桑折」パンフレット

伊達氏関連遺跡における活動は、桑折町が平成 22 年(2010)に伊達朝宗の墓所や桑折西山城跡を巡回する散策ルート「歴史の小径」を整備するきっかけとなった。「歴史の小径」整備後も、桑折町文化財保存会は、このルートを歩いて伊達氏関連遺跡を見学し、「歴史の小径を歩く」というイベントに参加することによって、愛護活動を継続させている。現在まで行われている史跡桑折西山城跡の国史跡指定や公有化、そして整備事業は、これら町民の城跡に対する愛護活動の結晶であるということはいままでのない。



■図 桑折町文化財保存会の伊達氏関連史跡の愛護活動の取り組み
 桑折町文化財保存会が建てた標柱・案内板と文化財探訪コース（桑折地区・睦合地区東部）。

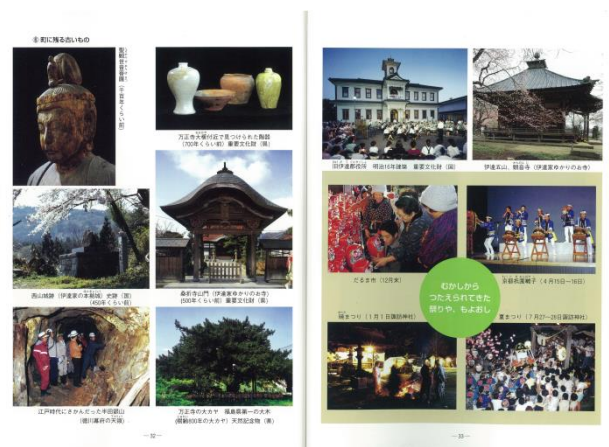
② 伊達氏関連遺跡における現在に続く教育活動

伊達氏の事跡については、教育の場でも広く教えられてきた。戦前は高館城が南朝の忠臣伊達行朝の居城として教えられ、戦時中の昭和 19 年(1944)に桑折醸芳国民学校（現醸芳小学校）の校歌にも歌われ、郷土から偉大な忠臣を輩出したとして、戦前の町民、ひいては国民の手本として教えられていた。

戦後も、郷土の状況を総合的に学ぶための副読本に用いられ、桑折西山城跡やふもとの観音寺、伊達朝宗の墓所や万正寺の大カヤは、町内小学校の遠足や社会科見学の目的地となった。その際、観音寺住職が寺の歴史を解説し、あるいは、伊達氏関連遺跡の多い万正寺地域の人たちが現地では子供たちに説明している。



■写真 桑折西山城跡での社会科学習
攻め手、守り手に分かれての実戦体験。



■写真 副読本『わたしたちの町桑折』
観音寺や桑折西山城跡などが掲載される。

こうした地域の住民たちが教育の場で郷土の歴史や文化財について伝えていく活動は、近年は教員が地元出身ではないため、より地域に詳しい地元住民に教えてもらうことが学校教育でも不可欠となっている。そこで、「総合的学習の時間」や社会科で地域の歴史に詳しい桑折町文化財保存会の会員が、現地や学校の教室に出向いて教え、子供たちは城跡や伊達氏関連遺跡、伊達氏を中心とした郷土の歴史について学び、桑折を中心として、伊達郡から南東北地方を治め、かつ江戸時代には、仙台という東北の中心都市を築き上げた伊達氏の発祥の地であるという誇りを育んでいる。

(5) おわりに

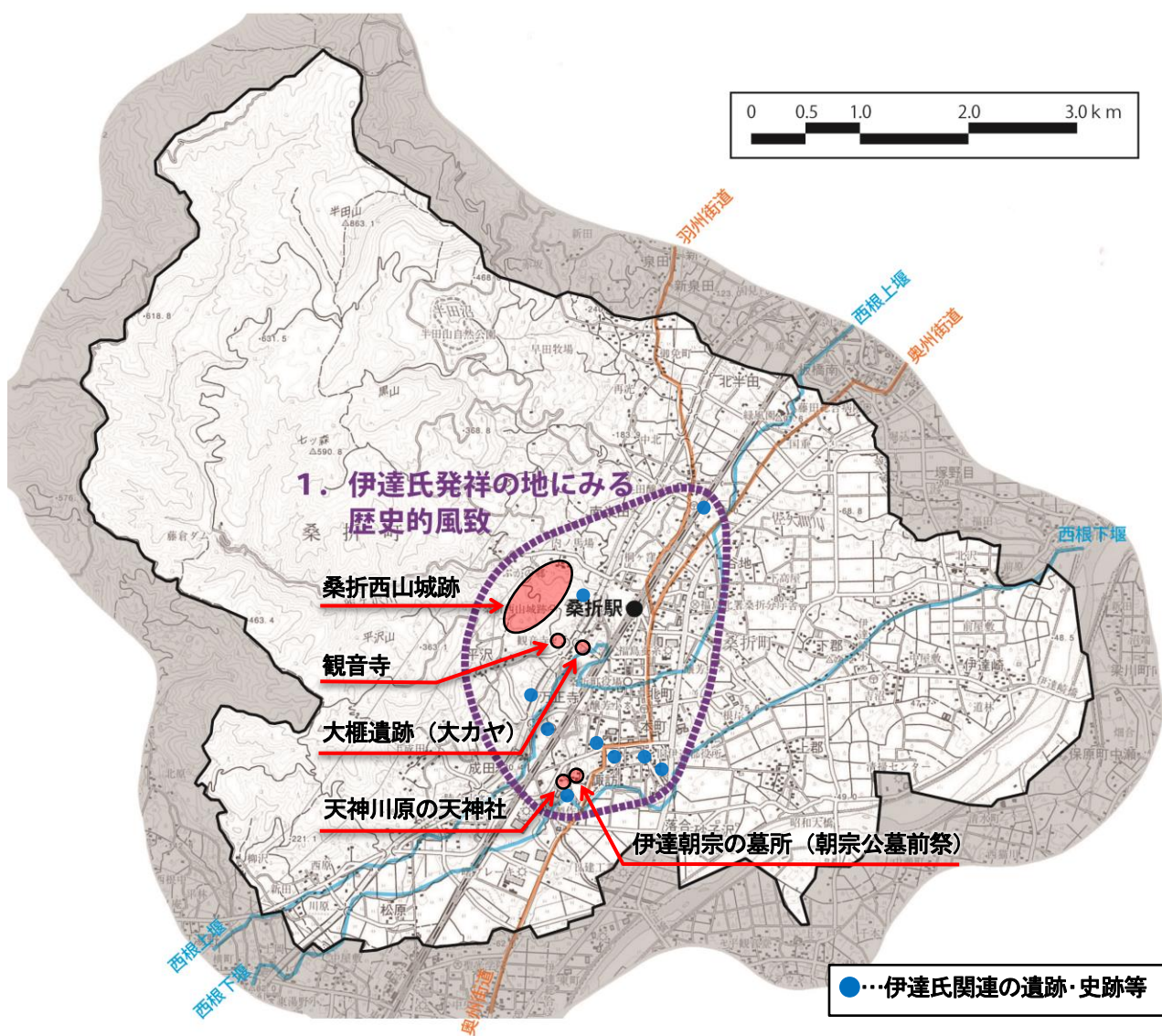
このように、桑折西山城跡をはじめ、伊達朝宗の墓所、観音寺等の伊達氏関連の遺跡は、古くから地域統合の象徴として大切にされ、子供たちにも伝えられてきた。その活動は、戦争によって一旦は途絶えかけたが、地域の人々は、伊達氏発祥の地としてのプライドを賭けて荒廃しつつあった伊達氏関連遺跡の保護、愛護活動を継続していった。

戦後も桑折町の子供たちは、小学生の頃から郷土が伊達氏のルーツの地であったことを教

わり、これを誇りに思うことで町民気質が形成されてきたといえる。城址碑の建立や墓所の保護を行い、伊達家の歴史について語り継いできた愛護活動や、遠足や社会科見学で伊達氏関連遺跡を訪れ、地元の古老から伊達氏の歴史について聞いてきた学習活動は、町民の「伊達氏の発祥の地は桑折」という誇りとして、今も受け継がれている。伊達氏関連の遺跡を守り、そして未来に伝えていくということは、桑折町民の宝を大切に守り続けていくということでもある。



■写真 歴史の小径をたどりながら伊達氏関連遺跡を巡る
中屋敷観音堂跡付近、背景の山が桑折西山城跡。



■図 伊達氏発祥の地にみる歴史的風致の範囲

2. 桑折宿と諏訪神社の夏祭りにみる歴史的風致

(1) はじめに

桑折町の中心市街地は、江戸時代の奥州街道の宿場町桑折宿が母体となっている。幕府の代官陣屋が置かれ、伊達崎村をはじめ周辺の蚕種本場や幕府領からの物資が集まり、かつ半田銀山へ物資の供給、消費の地となる等、西根地方(阿武隈川左岸)の政治・経済の中心的町場であった。明治維新後も郡行政の中心となる伊達郡役所が設置され、福島県令三島通庸の政策によって新道建設などの市街地再開発が行われるなど、その地位を継続し続けた。

現在でも、江戸時代に区画された町割りや寺社の境内がそのまま残り、地域の住民が大切に守り続けてきた祭りが桑折宿を中心に毎年行われている。

(2) 諏訪神社の起源

字西町の町裏に位置する諏訪神社は桑折町の旧村社で「村の鎮守」であった。言い伝えによると、伊達朝宗が居城高館城の城地守護神として勧請したのが始まりとされる¹。諏訪神社はもともと桑折西山城（高館城）にあったとされるので、その麓の高館観音（現観音寺）との関連が考えられる。



■写真 諏訪神社拝殿・本殿

慶長3年(1598)、現境内地に移されたが、元禄10年(1697)、桑折藩主松平忠恒が社殿を建立し、神輿や神宝等を寄付したという。江戸時代中期から、禰宜は仙台藩主伊達家に度々謁見を許されており、創建時の伊達氏との関連性が読み取れる。明治4年(1871)、郷社に列せられ、同8年(1875)には伊達郡川西の総鎮守とされた。同11年(1878)、本殿が改築されたが、同26年(1893)に火災で焼失した。その後、仮宮が建てられたが、大正12年(1923)本殿・拝殿の再建に着工し、翌年(1924)9月に落成したのが²、現在の社殿である。

¹ 伊達朝宗の居城は高館ではなかったことは発掘調査等で判明しているが、神社の縁起ではそのようになっている。(桑折醸芳尋常高等小学校『桑折町郷土誌』(桑折醸芳尋常高等小学校1940年)160ページ) 伊達氏の入部当初から、居館の守護神として祀られていたということであろう。

² 前掲『桑折町郷土誌』161ページ

(3) 諏訪神社例大祭の歴史

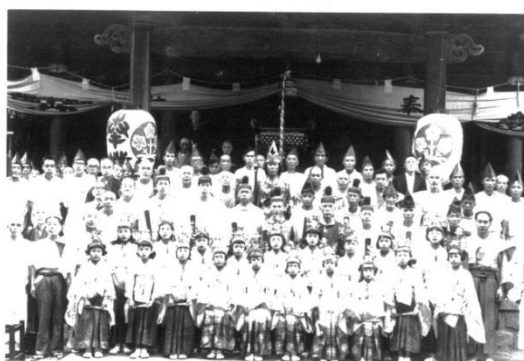
伊達氏が桑折西山城を本拠としていた天文5年(1536)に制定された家法「塵芥集」には、その第1条に、「神社について、祭礼は豊年凶年に関係なく、先例のとおり実行すること」と定められている。当時の諏訪神社の祭礼を明らかにすることはできないが、弘治3年(1557)8月の梁川八幡宮の祭礼で、桑折鎮守諏訪大明神が弘誓祭を担当している³。弘誓祭がどのような祭礼であったか不明であるが、救世観音信仰に基づく仏式の祭礼であった可能性が高い。



■図 諏訪神社(桑折村絵図より)

江戸時代にはどのような形態で祭礼が行われてきたのか、火災による焼失のため、明確な記録がないが、明治12年(1879)に完成された『伊達郡村誌』には「例祭7月27日同28日神輿を奉じ村内を巡る」との記載があり、明治44年(1911)に編纂された『桑折町郷土誌』には「祭典は7月27、8両日に行う。祭日は一般休業をなす。27日は式典を挙げ、28日には神輿渡御し、神社に功勞ありし人家に休憩し給い、氏子惣代及び関係者の家には御幣を廻し給う習慣なり。そのほか修繕改築等のことある時は御遷宮祭と称して神輿渡御あることあり」と記載されている。

江戸時代の桑折宿では2と8のつく日に市が、さらに、7月28日には祭礼とともに大規模な生糸市がそれぞれ開催されていたという。明治維新後もしばらく太陰暦のまま祭礼が行われていたが、明治43年(1910)には太陽暦へ変更されている。現在は梅雨明けの夏祭りとの認識がある諏訪神社祭礼であるが、かつては晩夏～初秋の祭りだった。また、『桑折町郷土誌』に、神輿の渡御、駐輦所などが記載されており、現在の例大祭が、明治末期と基本的には変わっていないことがわかる⁴。



■写真 祭礼の様子(戦後)



■写真 やたいが練り歩く様子(昭和60年頃)

³ 梁川町関根重治氏蔵文書「梁川八幡宮祭礼規写」桑折町史編纂委員会『桑折町史第5巻』(桑折町史出版委員会1987年)中世史料372

⁴ 桑折町『桑折町郷土誌』(桑折町1911年)97ページ

(4) 諏訪神社例大祭

諏訪神社例大祭は、毎年7月27、28日に行われてきた夏祭りである。神輿が町内を回り、山車が出て祭りに賑やかさを添える。その笛と太鼓の音が桑折の夏を告げる風物詩となっている。

① 準備

諏訪神社例大祭は、前述のとおり7月27日、28日に執り行われることが伝統であったが、近年の社会情勢の変化により、平成27年(2015)より7月最終の土、日曜日に開催されるようになった。総代を筆頭とした氏子らが祭りの打ち合わせを行い、開催に向けて準備を進めていく。

祭りを盛り上げる囃子の練習が1ヶ月前から始まり、夜になると笛や太鼓の練習音が聞こえるようになり、山車を飾る花が作られはじめる。これらは、大人から子供へ、子供からさらにその子供へと指導の流れができており、地域社会の貴重な交流の場ともなっている。

祭りの1週間前、神社と桑折市街地の入口に当たる場所に、地元消防団が旗を立てる。旗が揚がると、旧桑折町の人々は祭りがいよいよ始まることを実感する。神輿が巡行される経路に各町内会でしめ縄を張り、また、旧家の前には神輿を迎えるための提灯が飾られ、地区を挙げて祭の準備を行う。神輿の休息所は昔から定まった家があった⁵。



■写真 山車の飾り花つくりと囃子の稽古 大人から子供へと伝承されていく

② 当日

神輿は昭和30年(1955)に合併する前の旧桑折町内各地を回りながら、各地で神事を執り行い、稚児舞を奉納し、祓いをして回る。若衆は町内にある5つの山車を繰り出し、笛や太鼓を奏でながら、子供から大人までが一緒になり、山車を引いて各地区を練り歩く。

初日は朝、稚児行列と山車が桑折宿北端の駅前交差点を出発し、祭礼の幕が上がる。行列

⁵ 鈴木隆志「四 町のしきたり」桑折町史編纂委員会『桑折町史第3巻』(桑折町史出版委員会 1989年)259ページ

は旧奥州街道を約1時間かけて南下し、桑折宿の南端に近い諏訪神社の境内に入っていく。神社拝殿で玉串奉奠が行われ、太鼓が奉納される。その後、例大祭式が厳かに執行され、直会が行われて1日目の日程を終える。



■写真 北町の安達家(安達屋)(明治建造)前を進む稚児行列



■写真 太鼓奉納
各若連が競って「祇園」「八重桜」を演奏する

2日目は、昼過ぎに神輿の発輿祭が神社拝殿で執行され、町に繰り出す。神輿は、旧桑折村内の民家のある地区のほとんどを巡行し、各町内会で「祝詞」「剣舞」「稚児舞」を奉納する講中を執行する。講中は、かつては40ヶ所近くで行われていたが、現在は10ヶ所ほどになった。夕方7時ごろには、神輿は桑折宿北端の上町に到着し、ここから山車とともに桑折宿南端に近い諏訪神社へと進行していく。

山車は、宮本・二若・三若・北桑・睦の各若連がそれぞれ運行する。上町から諏訪神社まで、神輿と山車が付かず離れず旧奥州街道を約3時間かけて巡行し、桑折宿にお囃子を響かせる。また、神輿は各若連の事務所を渡りながら講中を行う。若連の事務所のうち、北桑若連の事務所は、明治39~40年(1906~07)に建築された栗花家(石田屋)に置かれ⁶、歴史的建築物を背景に神事が執り行われる。そして、桑折宿の要の位置にある旧伊達郡役所前では、5つ若連の山車が結集し、お囃子の披露を行う。桑折宿の象徴的な場所で、祭りのクライマックスとなる神輿のお宮入り阻止へ向かう気分を高めていく。そして桑折宿の西町通りで、山車が昔の奥州街道の道幅と変わらない道路いっぱい陣取り、神輿の行く手を阻み、神輿と山車をぶつける喧嘩祭に変わってくる。

繰り返すお囃子、飛び交う掛け声、神輿と山車の迫力のある衝突。そこでは、人々が日々溜めこんだエネルギーを一気に吐き出すような熱気に包まれており、それを見物している一般客もそれを直に感じ取ることができる。奥州街道桑折宿の町割りや、旧伊達郡役所をはじめ栗花家住宅など休憩所になっている古い町家などの歴史的建造物が、山車の明かりに照ら

⁶ 平成7年(1995)桑折町史編纂時の東北工業大学草野和夫研究室による近代和風建築調査の聞き取りによる。

されて、侘びた味わいのある姿を闇の中に浮かべあがらせ、幻想的な情景を醸し出す。祭と歴史的建造物が一体となった情景が、ふるさとの原風景として桑折町民の記憶に刻み込まれているのである。



■写真① 北町栗花家(石田屋)前での神事
建物は、明治39~40年建造で、北桑若連事務所となっている。剣舞が奉納されている。



■写真② 北町鈴木家(丸屋)前の山車
祭り見物客で賑わう北町通り。



■写真③ 旧伊達郡役所前に集合した山車



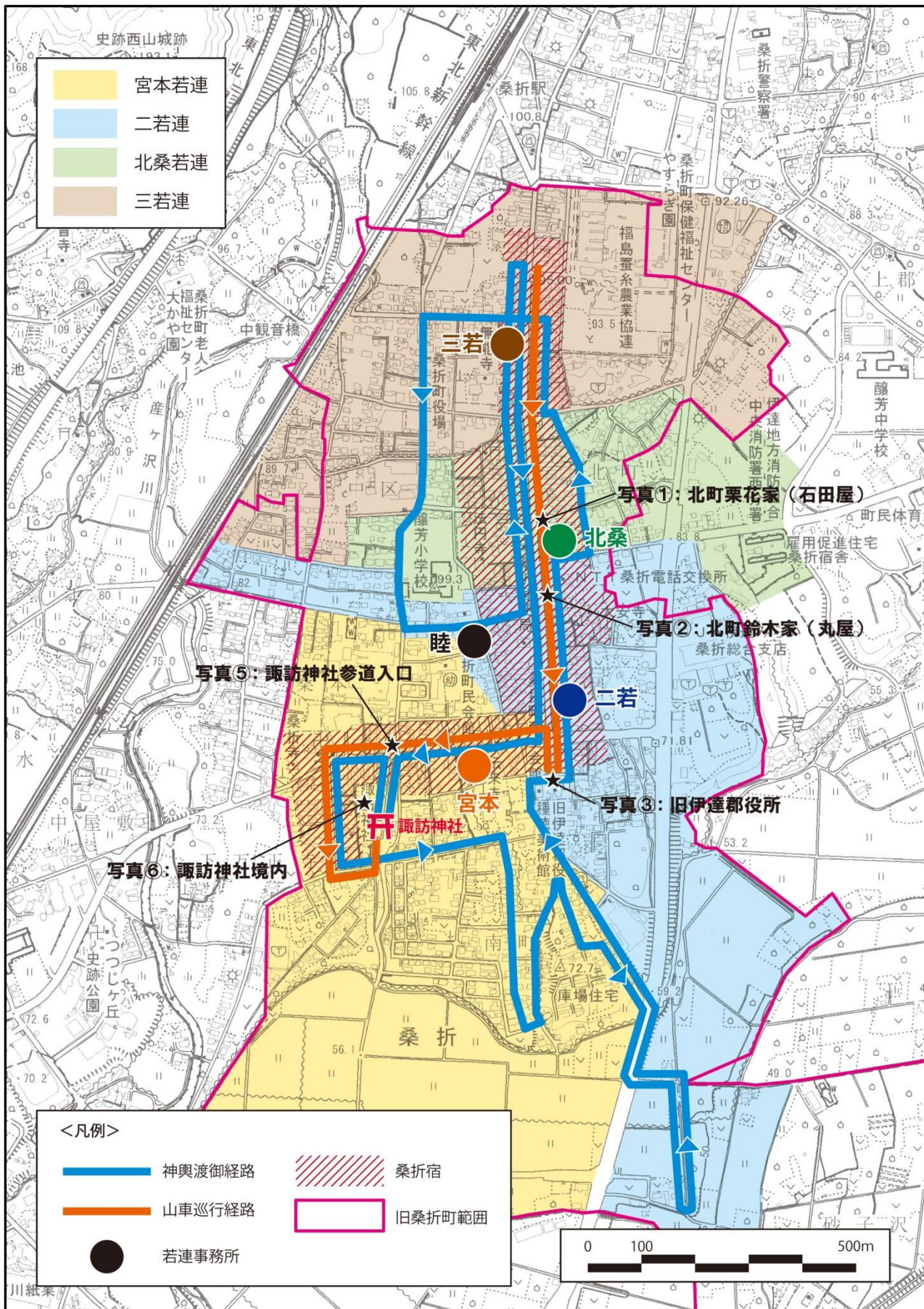
■写真④ 山車での祇園囃子演奏
巡行中、やむことなく演奏され続ける。



■写真⑤ 山車を神輿にぶつける白張(担ぎ手)
山車は参道を塞ぎ、神輿の行く手をはばむ



■写真⑥ 社殿にお宮入しようとする神輿



■ 図 神輿と山車の運行図と各若連の縄張（睦若連は地域を定めていない）

桑折宿は、伊達氏が西山城を築いた同じ時期に立てられた西山本町（現字本町付近）を母体に、江戸時代には奥州街道の宿場町として発展した。天和年間(1681～84)には、新町、西町、本町、北町、上町からなる、現桑折町中心市街地とほぼ同じ町割りとなった⁷。江戸時代から明治初期には、桑折宿は何度か大規模な火災に見舞われたが、これは、家屋が街道に沿って短冊状に密集しているため、延焼が免れられなかったためである。これに対応して、店舗や蔵には防火を意識した土蔵造が導入されるようになった。現在でもこの街道に沿った短冊状の町割りが区画として残り、土蔵造の建築は鈴木家(丸屋、現桑折御蔵)や斎藤家(扇屋)など、多数現存している。そのような、昔ながらの町割りのなかで祭りが進んでいく。毎年、梅雨明けのタイミングと重なり、夏を迎える風物詩ともなっている。

③ 祭りを支える人々

諏訪神社の氏子は、桑折地区の住民であり、諏訪神社例大祭には、現在、宮本・二若・三若・北桑・睦の各若連が参加する。睦若連を除き、基本的にはそれぞれ地区の住民が主体となって形成している。かつてはさらに多くの山車があったというが、時代の変化により現在に至っている。

祭りにはそれぞれが山車を出し、桑折宿を中心に、旧桑折町の隅々を回る。山車には大太鼓と小太鼓が備え付けられ、それに笛を加えて祇園囃子が演奏され、祭りに華と勢いを添える。山車の組み立てや装飾の方法、囃子の演奏の仕方は大人から子供へと伝えられている。



■写真 山車の準備
明治21年(1888)に作られた宮本若連の山車



■写真 神社社殿前に集結した山車
この後、各山車で太鼓を奉納演奏する

(5) おわりに

このように、諏訪神社の例大祭は、近隣の在郷町として古くから発展し、中心市街地であった桑折宿を舞台に繰り広げられる。地域の各地区を神輿が渡御し、各若連が競いながら独

⁷ 「奥州桑折之図」(大分市中根忠之氏所蔵) 桑折町史編纂委員会『桑折町史第1巻』(桑折町史出版委員会2002年)付録

自の山車を巡行させる祭礼は、大人から子供たちへと伝えられ、伝統文化を継承していく重要な場となっている。また、かつては例大祭に合わせて糸市が立ち、旧桑折町以外の近隣町村の人も集まって、ひときわ賑やかな祭礼となり、地域の代表的な祭礼となっている。

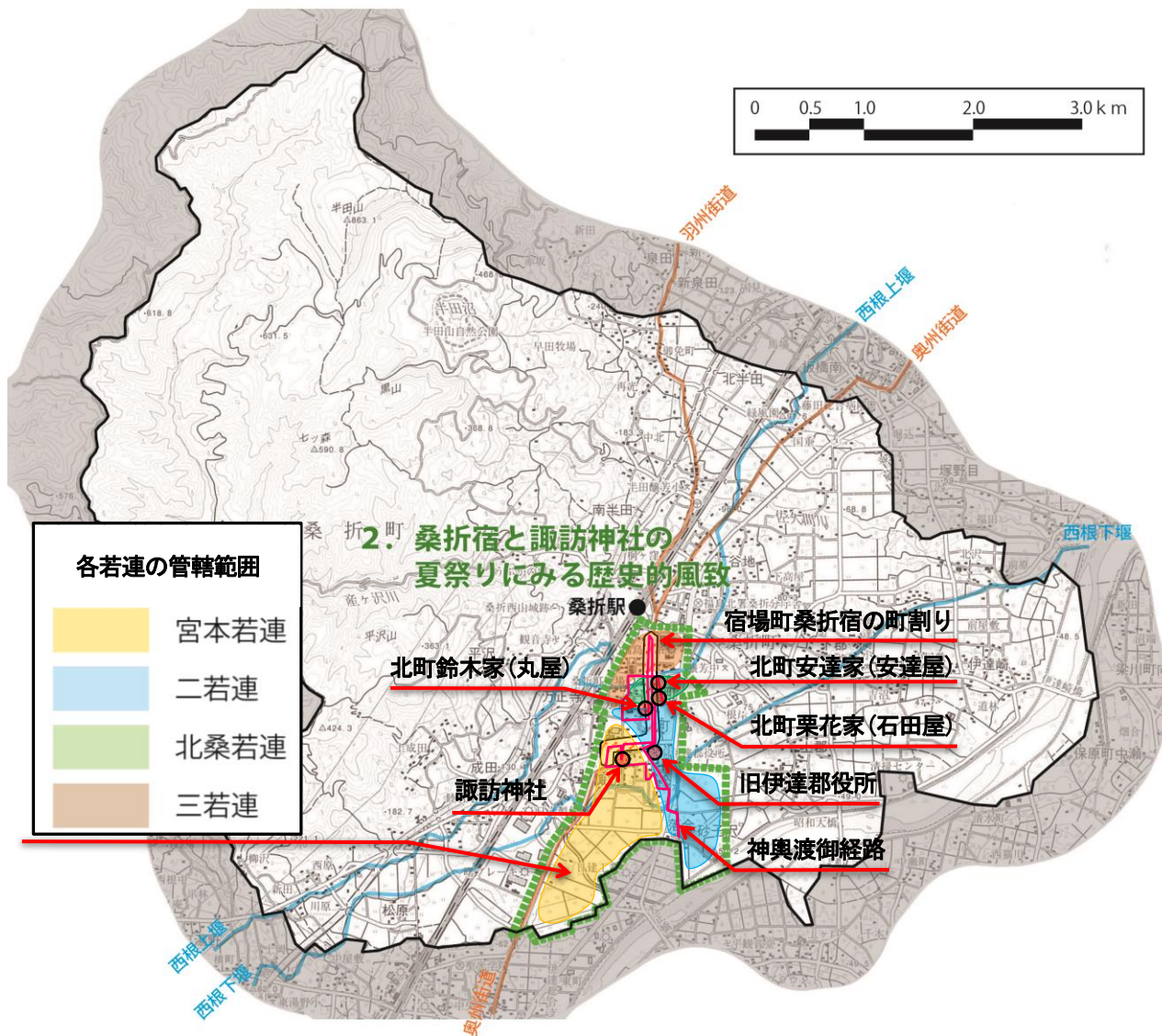


■写真 睦若連の太鼓奉納

桑折の人たちの祭りを受け継ぎ、後世に伝えていくという心意気は並大抵のもではなく、大人になって桑折を離れた人たちのなかには、「お祭りのときだけは仕事の休みをもらい、帰ってきて参加する」という人も多い。祭りは、桑折の住民の誇りを形成する場となっている。

睦若連は、縄張地域を定めておらず、桑折地区だけでなく、他の地域から参加している人もいます。

「お祭りのときだけは仕事の休みをもらい、帰ってきて参加する」という人も多い。祭りは、桑折の住民の誇りを形成する場となっている。



■図 桑折宿と諏訪神社の夏祭りにみる歴史的風致の範囲

コラム① 奥州・羽州街道追分と街道を活かしたまちづくり

江戸時代、東北地方の2大幹線道路であった奥州街道と羽州街道は、桑折宿で分岐していた。羽州街道は桑折宿の北で奥州街道と分かれ、山中七ヶ宿・上山・山形・新庄・秋田・大館・弘前を經由して、油川(青森市)で再び奥州街道と合流する街道で、秋田藩、弘前藩など10数藩が参勤交代で利用した。明治になって山形方面の主要交通路が万世大路ばんせいだいろと呼ばれる国道13号に移り、さらに、鉄道の奥羽本線が開通すると、羽州街道は衰退した。

分岐点のあった谷地字追分は、かつては道標や句碑、庚申塔などが建てられていたが、道路の拡幅と住宅地の展開により、近在の神社や寺院に運び出され、昔日の面影を失っていた。しかし、交通の要衝であった桑折町民の街道への思いは強く、昭和59年(1984)に桑折町文化財保存会によって、失われた道標に替わる記念碑が建立された。さらに、これら2つの主要街道とその分岐点をまちづくりの中核にしようという地域住民らが、古い宿場案内の挿絵や寺社に移された古碑を調査し、往時の追分を再現しようという機運を高めた。平成19年(2007)、地域住民と国・県・町が協力して追分跡地に道標や句碑などの石碑を戻し、挿絵に描かれていた柳の木や御休所を再現するかたちで小公園が整備された。

整備後も地元町内会で花植えや剪定、御休所への文芸の掲示を行い、また、追分にとどまらず、羽州街道や奥州街道を実際に歩いて見学する活動が続けられている。さらに、これをきっかけに、奥州街道沿線の古い町並みを活かす試みがなされ、桑折町女性団体連絡協議会による「桑折御蔵おんくら」と名付けられた明治期建造の鈴木家(丸屋)を活用した「おもてなし」、桑折町商工会による「街道祭り」など、街道や宿場町をテーマとした活動が現在も続けられている。



■写真 整備された追分



■写真 羽州街道を歩く人々
半田銀山のトロッコ線路が街道を跨いでいたところ。



■写真 再現のもととなった「商家高名鑑」
(福島県歴史資料館所蔵)

コラム② 7年に一度の御柱祭

遷宮 800 年を記念して、長野県の諏訪大社に倣い、平成 4 年(1992)から 7 年毎の寅と申の年に御柱を立てる祭事を行っている。桑折の諏訪神社は火災で記録を焼失しているため、宮城県白石市の越河諏訪神社を模した。

祭礼初日に、町内の建設業者の協力のもと、事前に山から切り出し、樹皮を剥いたモミノキの神木を神社まで運ぶ里曳祭が開催される。神木は台車に乗せられ、奥州街道を氏子たちに曳かれ、諏訪神社まで運ばれる。境内には柱穴が掘られ、先端を縄で縛った神木を氏子が引っ張り立てる。

神殿の四隅に建てて結界とするのが本来であるが、敷地との関係から、2 本を並べて立てている。次は、平成 28 年(2016)に行う予定である。



■写真 西町通りをゆく御柱



■写真 御柱を立てる
祭りのクライマックス。